

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 呉 世宗

論文題目 リズムと抒情の詩学—金時鐘『長編詩集 新潟』の詩的言語を中心に

論文審査委員 鶴飼哲教授、イ・ヨンスク教授、松永正義教授

1 本論文の構成

本論文は在日朝鮮人詩人・思想家である金時鐘の作品を、『長編詩集 新潟』を中心に、その中心的な方法論である「短歌的抒情の否定」との関連で検討したものであり、在日朝鮮人文学論、植民地文化論、近現代日本・朝鮮関係史、翻訳論、近代日本文学史、戦後詩論等の多領域を横断する比較文学的研究である。

本論文は次の各章から構成される。

序章

第一節 本研究の目的

第二節 研究環境及び『新潟』研究史

第三節 本研究の構成

第一章 まみれることのない純粹な短歌から、垢じまない抒情へ
はじめに

第一節 短歌的抒情による実存と情景の変質

第二節 日本近代詩歌からの影響

第二章 明治二〇年代におけるリズムと抒情の再編制過程

第一節 時枝誠記のリズム理論—「場面」について

第二節 『新体詩抄 初編』の役割

二-一 はじめに

二-二 「音調」と「平常ノ語」

二-三 徳としての「本音」

第三節 韻律についての諸議論

三-一 音数律の限界

三-二 リズムと理としての余情

第四節 本質としての内容とその再編

四-一 内容の感情化—森鷗外

- 四-二 内容のナショナルな編制—日清戦争、故郷、詩、詩論
- 第五節 リズムと抒情の結合—共同化するリズム
 - 五-一 高山樗牛の詩論
 - 五-二 島村抱月の詩論

第三章 金素雲訳『乳色の雲』の需要の仕方—佐藤春夫を中心に

- 第一節 金素雲訳『乳色の雲』の需要の仕方
- 第二節 「半創作」的翻訳とは何か—『朝鮮詩集』の基調
- 第三節 翻訳の方法及び思想—「私」と対象の分節、自己触発、「こころの翻訳」
- 第四節 金時鐘訳『再訳 朝鮮詩集』について
 - 四-一 表現されたリズム
 - 四-二 論理の工夫
 - 四-三 対象と「私」—「心」の対象化、抒情をはずすこと、呼びかけ
- 第五節 翻訳が認識に与える影響について—植民地状況を中心に
- 第六節 本章のまとめ

第四章 小野十三郎『詩論』と金時鐘の関係

- はじめに
- 第一節 小野の「リズム」が批判するもの
 - 一-一 生活
 - 一-二 音楽—アララギ派と萩原朔太郎を中心に
- 第二節 「批評」—言葉、生活、素朴さ、科学
- 第三節 「リズム」と「批評」
- 第四節 金時鐘における「リズムとは批評である」—「自然」と距離

第五章 距離の多角的表現—『長編詩集 新潟』の方法論に至るまでの過程

- はじめに
- 第一節 『地平線』
 - 一-一 時代背景
 - 一-二 『地平線』の表現について
- 第二節 『日本風土記』—距離の多様な表現

第六章 道と変身

- はじめに
- 第一節 道と光
- 第二節 擬態としての「日本語」と「擬態」としての自己の交差—分裂する自己
- 第三節 「擬態」としての自己と朝鮮語の関係

第七章 意志—日本語への報復と距離の問題化について

第一節 意志について

第二節 「蛹」と日本語—停滞と「日本語への報復」の発現

第三節 身体による距離への問いかけと世界の開示

三-一 吹田・枚方事件

三-二 排泄と身体

三-三 もよおす身体と世界

第八章 歴史と自己—金時鐘とリズムの思想

はじめに

第一節 汀線—日本と朝鮮のはざま

第二節 故郷について

二-一 つぶやき—語りの行方

二-二 重層化する故郷

二-三 故郷と「つぶやき」の関係

第三節 船から骨へ—証言としての詩

三-一 証言と詩の重なり合い

三-二 「船」—航海しないもの

三-三 「水死人」—無音なる残余

三-四 炎そして「船」—出来事の現れと喪失

三-五 骨から灰へ、灰から骨へ

第四節 小括—『新潟』に現れるリズムの思想

結論

参考文献

金時鐘簡易年表

2 本論文の概要

序章・第一節ではまず、詩人・金時鐘の経歴が触れられたのち、1929年生まれの彼の幼・少年期の歴史的状況が略述される。それは第八代総督南次郎統治下の植民地・朝鮮であり、37年の日中全面戦争開始後は、内鮮一体のスローガンのもと、皇民化政策がいつそう強化されていた。そのなかで金時鐘は、日本語の新聞や世界文学全集がある知識層の家庭に育った。形成期に近代日本語の抒情詩に親しんだ皇国少年であった金時鐘は、解放後に朝鮮語を一から習得し、の

ちに亡命地・日本で、自身のうちなる日本語と格闘しつつ特異な日本語詩を書くことになる。その創作の指針である「短歌的抒情の否定」という思想を、金時鐘はアナキスト詩人・小野十三郎に学び、独自の方法に錬成していった。本論文は第一に、この「短歌的抒情」に関し、日本近代詩形成期におけるリズムと抒情の関係を問い、第二に、金時鐘の詩の分析を通して、彼が理解し実践した「短歌的抒情の否定」の意味を明らかにすることを目的とする。第二節では、金時鐘についての先行研究が網羅的に紹介されるとともに、濟州島四・三事件、朝鮮戦争期の反戦運動である吹田・枚方事件、『長編詩集 新潟』の重要な主題のひとつである在日朝鮮人の朝鮮民主主義人民共和国への帰国事業等、彼が関与した歴史的出来事に関する近年の歴史研究の、本研究の主題との関連における意義が述べられる。第三節では、各章の要点が簡潔に予告される。

第一章では、自伝的エッセー「日本語の石笛」を出発点に、「朧月夜」など日本の唱歌や季節の風物を歌った短歌・近代詩が、少年・金時鐘の心的秩序にもたらした作用が検討される。「はじめに」では、まず、金時鐘がみずからの目指す詩の境地を「まみれても垢じまない抒情」としていることが指摘され、その抒情の質が、のちに金時鐘が教育経験を通じて発見することになる、母国語を話せない在日朝鮮人の子弟にも宿る言語の身体性、歴史性と関連することが示唆される。第一節では、金時鐘が国民学校時代に教えられた日本の唱歌が具体的に特定され、形式および内容上の特徴が分析される。また、歌の情感と風景の関係が植民地において被る変質が問題化される。第二節では、金時鐘が同時期に学校で暗唱させられた古今の短歌が列挙され、そこに共通する散華のイメージと七五調の定型性が指摘される。そして、これらの「戦争にもまみれることがなかった至純なまでに純粋な短歌」こそ、金時鐘がぬきさしならない対決を迫られた「重い思想詩」であったことが確認される。

第二章は、近代定型詩のリズムと抒情の形成過程の解明を課題とする。第一節では時枝誠記の『国語学言論』におけるリズムの理論が取り上げられ、主体の情態性、情景および聴手が統合された場としての「場面」という独特の概念との関連が分析される。時枝はリズムを「言語に於ける最も源本的な場面」とする。このことは彼の理論ではリズムが音節や形態素に先行することを意味し、話者は日本語で発話するやいなや「場面としてのリズム」と必然的に合致することになる。著者はこの理論が日本近代詩の達成の正当化という側面を持つことを指摘するとともに、そこに論理的には潜在しながら展開されなかった、言語や主体をはみ出すような「場面」の可能性を想定する。第二節では、明治二〇年代の新体詩をめぐる議論が検討される。日本人の漢詩の不自然さを強調する外山正一の指摘からは母語による詩作を当為とする立場が導かれる。また、井上哲次郎は日常語の使用を唱えたが、そこには新体詩が近代の日本語で書かれ、かつ歌われることを求める方向性が胚胎していた。そこから新体詩と学校唱歌の連関が生じ徳性の涵養という教育目的と結びつく。第三節では、韻律についての当時の諸議論が比較検討される。リズムをめぐる元良勇次郎、大西祝、芳賀矢一らの説が概観されたあと、山田美妙の『日本韻文論』が詳しく検討される。山田は「節奏」という独自の概念を軸に韻文の定義の形式化を押し進め、そのことによって詩の思想を普遍的なものに開こうとした。第四節では、明治後期の詩の思想内容の再編が論じられる。森鷗外は美妙を批判して詩における内容の優位を主張するとともに、思想よりも感情に詩の本分を置いた。日清戦争期になると詩の内容がナショナリズムに強く規定されるよう

になるが、著者はこの戦争の開戦の詔勅と当時の軍歌および新体詩の比較を通じてこの変容をあとづけ、とりわけ故郷という主題がこの時期に登場していることに注目する。第五節では、日清戦争後の韻律論を検討し、リズムと抒情が共同化に向かう流れが分析される。高山樗牛は内容と形式の必然的一致を唱えたが、それに対し島村抱月は、内容／形式の二元構造を主観と言語の双方に認めることで理論を精緻化した。島村はさらに同一の美的感動を惹起させるべき他者の存在を想定しており、リズムに社会の共同体化を促進する機能を担わせる結果となった。

第三章では、金素雲訳『乳色の雲』と金時鐘による同一作品群の再訳の比較検討を通して、朝鮮人詩人に対する日本近代詩のリズムと抒情の影響の意味が検討される。「はじめに」では、五七調文語体による金素雲訳の持つ問題点が指摘される。第一節では佐藤春夫の評価を中心に、日本における『乳色の雲』受容の諸問題が分析される。第二節では、朝鮮語原文と突き合わせ、北原白秋など日本人詩人の影響も考慮しつつ、金素雲訳の半創作的性格が浮き彫りにされる。第三節では、金素雲訳における多様な技巧が、対象と「私」との分節の仕方を軸に検討される。第四節では、金時鐘の『再訳 朝鮮詩集』が、リズム、統辞法、対象と「私」の分節法などの観点から論じられる。金素雲訳において対象が「私」に取り込まれる傾向があるのに対し、金時鐘訳ではその距離は尊重されている。また、「私」の意志がより強調され、植民地期の朝鮮語詩における抵抗の寓意が鮮明に表出される。総じて、原作の内的な論理が翻訳において明確化されている。

第四章では、金時鐘に強い影響を与えた小野十三郎の『詩論』が主題的に論じられる。「はじめに」では、小野と金素雲の対談の事実が確認され、金時鐘の小野十三郎との出会いの経緯が想起されたのち、小野『詩論』の検討が「リズムとは批評である」という命題を中心に行われることが予告される。第一節では、小野のリズム観が生活を重視していることが指摘され、生活から遊離した詩のリズムの典型としてアララギ派から萩原朔太郎に至る主観主義の系譜が批判的対象であると主張される。青年期に朔太郎の影響を受けた小野は、その「内面のリズム」論をいったん受容しつつ、のちにその「内面」に社会的性格が欠如していることを批判したのである。第二節では、小野が主張する「異構造の詩」の「批評」性が、外部を情緒化せずに直視し物事に語らせることで、生活の認識の変革と時代を超越した自己性の解体を目指すものであることが明らかにされる。第三節では、そのような小野の詩の批評性が、「流れるリズム」に対する「かたまるリズム」と規定されていることが論じられる。第四節では、以上の小野『詩論』の検討を踏まえ金時鐘によるその受容と変形が検討される。ここで著者は、小野十三郎の詩に現れる朝鮮人の形象の分析を通して、小野の詩が外部の対象との間に維持する距離の性格を問題化する。そして、小野『詩論』に関する金時鐘の発言を逐一検討して、「自然の奪回」という後者のヴィジョンに前者の思想との顕著な差異を認め、前者が「遠点」から生活を見つめるところで後者は生活のただなかに詩を発見しようとしたと結論する。

第五章では、金時鐘の初期作品に見られる、小野『詩論』の影響下に模索された、多様な「距離」の表現が分析される。第一節では、第一詩集『地平線』の成立事情が、当時の在日朝鮮人運動の展開や、金時鐘が中心的役割を担いその作品の多くを発表した大阪朝鮮詩人集団機関誌『ヂンダレ』の発行、朝鮮総連の文化政策との矛盾の深化などとの関連で叙述される。そして、『長編詩集 新瀉』の主要なモチーフが萌芽的に観察されることが指摘される。とりわけ、詩集出版

時に批判を受けた身体の生理的表現が、のちの大作の骨格となっていくことが強調される。その反面、対象との距離の取り方はなお小野『詩論』の線上にあり、対象と「私」との「絡み合い」は見られないとされる。第二節では、第二詩集『日本風土記』が、やはり距離の表現という角度から検討され、とりわけ「海」がモチーフとして登場してくることが注目される。ここでは距離はもはや単に空間的ではなく、沈没船の引揚げなどが主題化される場合には時間的、歴史的なものともなる。そのことが、祖国朝鮮とは異なる「在日」の時間の詩的造形という、将来の金時鐘詩の中心的課題を予告する。また、この詩集では動物の形象がいつそう頻繁に登場し「在日」する身体の隠喩群を構成しているが、ここに著者は『新潟』における動物や鉱物への多様な変身譚につながる端緒を見る。

第六章では、『長編詩集 新潟』の読解が本格的に開始される。ここで焦点化されるモチーフは「道」と「変身」であるが、とりわけ後者の含意が語り手の実存ばかりでなく、言語のあり方にもかかわることが強調される。第一節では、冒頭の「雁木のうた」における「道」の、「私」の固有性を剥奪し変身を強いる暴力性が問題化され、高村光太郎や北原白秋などに典型的な詩的象徴としての「道」との比較が行われる。また、ここでは「光」も「道」と同様の排他的な「筋」であることが指摘され、盲目の「みみず」への変身の重要性が強調される。この変身は道＝光の圧力に対する強いられた応答であるとともに、「みみず」はそれらが制定する境界をはみ出す日本語ではない「日本語」の象徴でもある。ここで著者は「擬態」の問題を提起し、他の変身に開かれた未然的存在として、「みみず」には「道」の規制力を無化する可能性と、環境に適應してしまう危険とが同居していることを論証し、この動物の「環形運動」が、もう一つの、代替的な「道」のイメージを示唆すると主張する。第二節では、「擬態」の問題が集中的に議論され、話者の実存の「あいつ」と「ぼく」への分裂が分析される。「あいつ」は在日朝鮮人運動の民族主義的傾向を代表し、その意味で道＝光に忠実であり、これを著者は第一の「擬態」としての自己とする。他方、「みみず」の「蛭」への変身は日本語への単純な同化を含意し、この方向への「擬態」の危険にさらされている「ぼく」が第二の「擬態」としての自己とされる。第三節では、「擬態」としてのこの二重の自己と朝鮮語の関係が分析される。この文脈で用いられる「俺」というもうひとつの一人称は、「ぼく」の「あいつ」への「擬態」の様態、すなわち「擬態」の「擬態」を示す。また、「俺」と日本の公安刑事である「犬」の追跡劇では、朝鮮人居住区で朝鮮語の運用能力を疑問視された「俺」が「犬」の立場に転落し、ここでは朝鮮語が、関東大震災時の朝鮮人虐殺において日本語が果たしたのと同様の、暴力的識別作用を發揮することになる。ここに至って、朝鮮語と日本語の間でアポリアを生きる自己にとっての「擬態」のリミットがあらわになる。

第七章では、『新潟』成立の背景として重要な在日朝鮮人の帰国運動との関連で作品の読解が進められるとともに、「意志」という新たな主題が導入される。1957年から1984年までに約9万3000人が日本から朝鮮民主主義人民共和国に帰国したこの事業は両国の赤十字の協定と合意のもとに行われ、朝鮮総連はこの事業を積極的に推進した。第一節では、この文脈で作品に現れる一連の模造にかかわる表現が分析される。この表現の系列は北への帰国が「本物」への再生として幻視されることに対応する。そして「ぼく」の分身である「あいつ」は帰国して

「本物」への「道」を進むが、この「闘争」的選択は日本からの「逃走」でもある。「意志」はこの「道」を選ばない「ぼく」の側にあり、それは行為によって測られるのではなく、むしろ残留という非行為による価値の転換を引き起こす。第二節では、この「意志」と言語の関係が「蛹」という形象との関連で論じられる。金時鐘の作品には季語への抵抗のさまざまな戦略が働いているが、春の季語である「蛹」もその一例であり、「霜」（冬）や「繭」（夏）との関連で複雑なイメージを形成する。「みみず」と同様変身以前の時間の形象である「蛹」は、ここで登場する「女」によって「すりつぶされる」。著者はこの「女」を日本語の比喻と解釈し、金時鐘が語る「日本語への報復」の方法が、「蛹」が「女」に対する主従関係を耐え抜きつつ、みみずからの内部から相手を異化する作用として表現されているとする。第三節では、朝鮮戦争期に反戦デモ隊と警官隊が衝突した吹田・枚方事件を題材とする箇所が分析され、とりわけ身体的・生理的な表現が詳細に論じられる。ここでも「あいつ」と「ぼく」の対比的関係が表現の構造を規定しているが、すでに「脱糞」した「あいつ」の軽やかさに対し「ぼく」は便意をこらえつつ遅れて隊列についていく。著者はこの構図の精神分析的解釈を試みるとともに、身体の切迫と排泄行為の不自由さに、逆説的に世界総体を照らし出す詩的可能性が付与されていると主張する。そして、この「こらえる」こともまた残留という非行為に通じる「意志」の形象であり身体的抵抗の一様態となる。

第八章では、これまで検討してきた歴史、祖国、自己、言葉などの相互的な関連が問われ、金時鐘のリズムの思想の総合的解明が目指される。「はじめに」では『長編詩集 新潟』以後の『光州詩片』から二つの詩が引用され、彼にとって詩が、過去の出来事とその概念化に抗して、生々しく言語に到来させる作業であるとされる。第一節では、『新潟』における重要な形象である、日本列島を東西に分割する断層線「フォッサマグナ」が注目され、これが時間の空間化として規定される。それはまた、「蛹」がここで、この断層に位置する「小石」「化石」に変身することとも通じている。このとき女性の形象の呼称が「夫人」から「妻」に変わるが、それは日本から朝鮮への転換を意味し、「妻」は「蛹」の孵化に能動的に関与する。しかし、そこにはまた、未然的存在であり決定不可能性の形象である「小石」を制御し、安定した意味を出産しようとする企図も含まれている。第二節では、二章で近代日本語の抒情詩に不可欠なモチーフとして言及されていた故郷という主題が、この作品でいかに表現されているかが分析される。故郷にかかわる表現は歌い上げられることなく「つぶやき」による語りとなる。そして故郷は、荒廃し地表が露出した大地として示される。このイメージは故郷の危機を表しており、そこでは季語の条件である季節の循環がなくなっている。また、歴史的に異なる時期に属する朝鮮半島の諸状況がこの故郷の像に重ねられていく。ここでは「短歌的抒情の否定」が集中的に追求されており、そのさまざまな手法が駆使される。これらの手法は、三章で検討された、金時鐘による朝鮮語詩翻訳の諸技法と共通の性格を持つ。第三節では、『長編詩集 新潟』における「船」の形象の分析を通して詩と証言の関係が論じられる。著者はここで、言語行為論のインパクトを受けた近年の証言論の展開を踏まえ、詩と証言に共通の行為遂行性を強調する。『新潟』の第二部で中心的な「船」の形象はきわめて多義的であるが、それは「帰国船」とは別の「船」であり、「ぼく」の思想」と多様な重なりを示す。西洋詩学で船はアリストテレス以来移送のイメージとして、意味の移送を原義とする隠喩の隠喩とされてきたが、金時鐘の「船」はこの伝統に属さず、また、日本近代詩に

において類型的な異界を目指す船の形象とも異なる。「とどまることを知らず」「永遠に埋もれる」という撞着語法は、著者によれば、運動と停滞の「同時性」、現在の分割を意味している。しかしこの「船」はまた、1945年8月25日、東北地方に徴用された朝鮮人が帰国するために乗船した船が、舞鶴港で謎の爆発を起こして沈没し、多くの人々が犠牲になったいわゆる「浮島丸事件」を暗示してもおり、そこから、済州島4・3事件で虐殺され海に遺棄された人々を含む、「水死人」の形象が重要性を帯びることになる。海辺に打ち上げられた遺体の腐乱は、著者によれば、内的な欠落と外部に開かれた断片性において、証言が語る断片化された出来事の提喻である。また、金時鐘の「船」の一樣態としての「無為」には、証言を真理への旅とする立場（フェルマン）よりも証言の可能性を潜勢性と読み替える立場（アガンベン）に近いものがあると著者は考える。こうして「船」は、「水死人」などの言語喪失の諸形象にともなわれつつ、語りの不可能性の開示とその可能性の暗示とを同時に担う残余としての形象となる。また、言語喪失の形象の系列の最後に位置する「骨」は、言語化しきれない出来事の物質性を暗示し、「船」は沈没船の爆破の際の浮上において「骨」との「邂逅」を反復する点で、過去を繰り返す生き直す金時鐘の詩作の原理を体現している。第四節では、『新潟』の最終章の読解を通して、ここまで論じられてきた諸々の詩的象と、この作品で暗示される歴史的諸事件が、作者のリズムの思想との関連で総括的に論じられる。

結論では、本論文の諸論点があらためて想起されるとともに、金時鐘がみずからの詩の理念として掲げた「垢じまない抒情」について、『長編詩 新潟』においてはそれが、変身によって日本語を内側から変質させ定型的な心的秩序を逸脱していく抒情、特定のイデオロギーに迎合しない、反復にもかかわらず失われない抒情として現れると概括される。そして、アナキスト詩人小野十三郎との出会いが金時鐘の社会主義思想に与えた影響、あるいは、『新潟』以後の金時鐘の詩と思想の展開などが、今後の研究課題として提示される。

3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は第一に、金時鐘の詩作の方法としての「短歌的抒情の否定」を、近代日本語抒情詩の成立、リズムと抒情をめぐる当時の論争、この課題を提起した小野十三郎の詩人としての形成過程に遡って詳細に検討し、金時鐘の方法の独創性を具体的に明らかにしたことである。この作業によって、近代日本語の詩の歴史における在日朝鮮人詩人の作品の位置づけ作業の水準が飛躍的に高まったと言って過言ではない。

第二に、金素雲訳『乳色の雲』と金時鐘訳『再訳 朝鮮詩集』の緻密な比較検討を通して、朝鮮語の詩作品の日本語への翻訳の諸問題が深く考究され、翻訳論上の大きな成果が得られたことである。この点でもまた、本研究は、これまでの研究水準を塗り替える画期的な業績であると言える。

第三に、なによりも、初期詩編から代表作『長編詩集 新潟』に至る金時鐘の諸作品を、作品の構造分析を目的とする内在的読解と、語られている歴史的出来事との関連で解釈を試みる外在的読解とを巧みに結合し、粘り強く、独創的かつ説得的に読み抜いたことである。とりわけ、近

年復刻刊行された諸資料を丹念に読み込み、最新の歴史研究の成果が的確に摂取されていることは特筆に値する。この点で本論文は、今後の金時鐘研究の礎石となりうる決定的な貢献を行ったとすることができる。

とはいえ、本研究にもいくつかの問題点は存在する。

第一に、近代日本語の抒情詩の成立過程に関する歴史記述に、日清戦争を契機とする詩的抒情とナショナリズムの共犯性の確立に一面的に向かう、ともすると目的論的な傾向が見られることである。明治20年代前後の日本の政治および文化には、結局実を結ばなかったとはいえ、多くの可能性が胚胎していたことも事実であり、そうした点を考慮することで、より厚みのある文学史的展望が得られるであろう。

第二に、『長編詩集 新潟』の読解において、在日朝鮮人の実存の分裂様態である「ぼく」と「あいつ」の関係性が、もっぱら対立を軸に記述されているが、この二つの様態は互いに分身の関係でもある。この論点をもう少し強調することによって、いっそう豊かな読みの可能性が開かれるであろう。

しかし、これらの問題点は、本論文が全体として達成した成果にくらべれば瑕瑾に類するものであり、その価値を大きく損なうものではない。本論文が、著者の今後の活躍をおおいに期待させてくれるすぐれたものであることにはかわりはない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

最終試験結果要旨

2009年7月8日

受験者 呉世宗

最終試験委員 鶴飼哲 イ・ヨンスク 松永正義

2009年6月24日、学位請求論文提出者 呉世宗氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「リズムと抒情の詩学—金時鐘『長編詩集 新潟』の詩的言語を中心に」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、呉世宗氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、呉世宗氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。